

# 序

## 1. コルカタ・アジア協会蔵梵文法華經紙写本 No. 4079 (A1)

このローマ字テキストの原本は、インド・コルカタのアジア協会が所蔵する梵文法華經紙写本 No. 4079 (略称A1)<sup>1</sup>である。紙写本には、(1) A1, C1, C2, P1, P2, T3のように、貝葉写本を忠実に写したと考えられるもの、(2) T8, P3のように貝葉写本の写しであるが、貝葉の失われた箇所を紙写本の読みで充当したもの、(3) A2, A3, R, T4, T5, T9のように、紙写本独特の読みを伝承する三種類に区分できることはすでに述べた<sup>2</sup>。

A1の書写年としては、ネパール歴800年(西暦1680年)という記述が見られ<sup>3</sup>、現在披見できる紙写本の中では最も古いものである。これは、ネパール系貝葉写本の書写時期(西暦10世紀頃から12世紀頃)から400年後に始まる紙写本の書写時期の嚆矢となったもので、その後の紙写本書写の流れの源流となった貴重な資料である。

## 2. A1と他写本との類似関係

A1は、章別に概ね以下のような貝葉写本に類似する。

### 第一章

T2に近い。筆者の A New Classification of the Nepalese Manuscripts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra (1)<sup>4</sup>と本書の付録 (pp. 279–336) A New Classification of the Nepalese Manuscripts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra (2)も参照していただきたい。

### 第二章

C4, C5に近い。

### 第三章から第六章

C4, C5, N1, Peに近い。

謝辞

8. 『パリ・アジア協会蔵梵文法華經写本(No. 2)一ローマ字版』2008年3月31日刊行
9. 『大英図書館蔵梵文法華經写本(Or. 2204)一写真版』2009年3月31日刊行
10. 『ケンブリッジ大学図書館蔵梵文法華經写本(Add. 1684)一ローマ字版』2010年3月31日刊行
11. 『大英図書館蔵梵文法華經写本(Or. 2204)一ローマ字版』2011年3月31日刊行

【第3期】

12. 『インド国立公文書館蔵ギルギット法華經写本一写真版』2012年3月24日刊行
13. 『ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所蔵梵文法華經写本(SI P/5 他)一写真版』2013年9月26日刊行

筆者は、「法華經写本シリーズ」の当初から様々な形で参画する幸運に恵まれた。第3期の掉尾を飾る本書以外に、上記の5、7、8、10を担当させていただいた。

このシリーズの目的の一つは、ネパール系諸写本の検証を行い、それらのグループ分けの作業を通じ、いわゆる「ケルン・南條本」の改訂版を編集するに耐えうるテキストの土台を構築することである。この基幹概念は、筆者の恩師である戸田宏文先生が何度も強調されていた事である。

筆者は、紙写本群の全容を明らかにすることはできたが、難関は貝葉写本群である。新しい校訂本の底本をどの貝葉写本にすべきなのか、その結論を未だに見出せない。筆者の今後の作業は、絞り込んだ何種類かの古写本を注意深く読むことである。底本さえ決まれば、偉大な「ケルン・南條本」に比して遜色のない、ギルギット・ネパール系の梵文法華經校訂本を作成する道は、比較的なだらかな行程となるはずである。

ともかく、ここまで歩んで来られた20有余年の歳月に練り込まれた自身の運命に感謝します。それは、公私ともに筆者を支えてきてくださった多くの方々への感謝に他なりません。

まず、創価学会インタナショナル(SGI)会長、池田大作先生に本書を捧げ、心からの御礼を申し上げます。

次に、原田稔創価学会会長と関係部局の皆様は厚く感謝いたします。また、東洋哲学研究所の川田洋一所長(代表理事)、萩本直樹専務理事、小関博文事務局長ならびに職員の皆様に御礼を申し上げます。特に、大内裕家氏にはお世話になりました。また折にふれ激励をいただいた森田康夫氏に感謝の意を表します。

創価学会国際室翻訳局の水船教義氏は、梵文法華經写本研究の学友として、筆者と同じく戸田宏文先生の膝下で学び、本シリーズの11を上梓されました。そのみならず、全巻の編集と国内外の渉外を担当するという、余人には代えがたい役割を果たしてこられた友であります。その忍耐とご苦勞を称えたいと思います。

謝辞

最後に、本書のレイアウト指導等の高度な編集作業を引き受けてくださった翻訳局の渡辺茂樹氏、日本写真印刷株式会社の方々、ならびに英文の校正を担当していただいたデイラン・スカダー氏に感謝申し上げます。

2014年2月10日 京都  
東洋哲学研究所委嘱研究員  
小槻 晴明